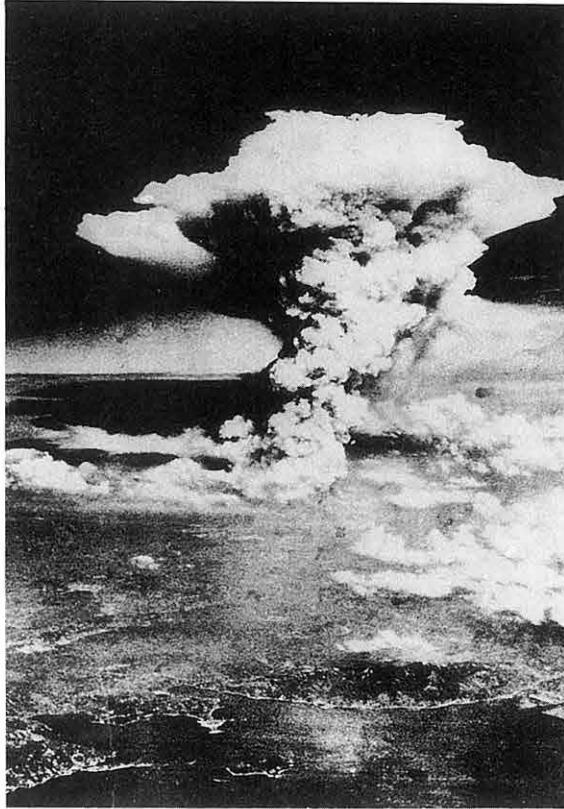


# 原 爆



原子爆弾のキノコ雲（昭和20年8月6日）

〈提供 毎日新聞社〉

# 原爆体験記

●梅里一丁目

岡保 宣明

(昭和七年生まれ)

キラキラと八月の太陽が草も木も一本もない焼け野原の街跡を照りつけていた。すでに日本の敗戦も近く、私の住む街も一か月前の米軍機の爆撃でほとんどが焼き払われてしまっていた。

当時、広島市内の中学校に私は国鉄を利用して通学していたが、連日にわたる米軍機の空襲で国鉄のダイヤは乱れていて、一時間以上も遅れてきた満員列車にやっと乗れたのであるが、このことが命をとりとめることになろうとは、夢にも考えられなかったのである。

この時期、すでに中学校での授業はほとんど無く、中学生も学徒動員で軍需工場にかりだされていたが、私は低学年のため広島市内の疎開跡地の整理にまわされて、毎日解体家屋の跡かたづけに汗を流していた。やっと広島駅に着き、作業の集合場所に行くため市電を待っている長い人の列の後方に並んだ。すでに集合時間に大幅に遅れ、暑い夏の太陽の光を頭上にうけ、なかなか来ない市電をイライラしながら待っていたところ、前方で「B29が飛んでいる」との声に私は空を

見上げた。雲一つない青空にゴマ粒のような物体が一つ悠々と動いている。連日のように単機で高空を飛来してくるだけなので、私たちは防空壕にも入らず、ただボンヤリと空を見上げるだけであった。

ようやく市電が停留所に入ってくるのが見え、広島駅庁舎屋上で点呼でもとっているのか人影が動くのがチラリと望見された。と、その瞬間空から何万燭光しょうこうともいいようのないほどの写真のフラッシュの青白い光が走りぬけた。同時に真暗となり轟音が続いて起こり、三メートル余りも私は吹き飛ばされた。真赤に焼けた瓦、ガラス、鉄板等の物体が雨のように落下してくる。何が起こったのかサッパリ判からず、しばらく過ぎて起き上ったが、同時に左顔面、右手両足が丸太棒でなぐられたような痛みと痺れを感じた。

周囲が明るくなるに従って街の様子が一変しているのに驚き何がおきたのか全然判からない。ガスタンクが爆発したのではないかと思った。みわたすと木造家屋の壁は落ち瓦、窓ガラス、商店の看板等は全部吹き飛ぶか、壊れてしまっ

る。電車に乗っていた運転手、車掌、乗客の人たちは、吹き飛ばされたのか姿が見えない。とにかく学校へ行き事情を聞き、治療をうけねばと思い歩き始めたが、路上に倒れてピクリとも動かない人、倒れて痛い痛い泣きながら水をくれといっている人たち、帽子を吹き飛ばされ顔面真赤に血を流しヨロヨロと歩いている人で、街は混乱を極めている。ゆき交う人は皆着衣がボロボロに焼きちぎれ、顔も手も足も火傷とススで真黒になっている。とくに女性の髪の毛はザンバラとなり、男も女も幽鬼のように水を求めて歩いている。半壊の家の下敷となり、泣きながら顔と手だけを出して助けを求めている女性がいたが、歩ける人も皆ひどい火傷をうけ、歩くのが精一杯であり無傷の人はいないので、皆心を鬼にして逃げて行ったのであるが、今でもあの女性はどうなったであろうかと、心が痛む。

私も火傷が次第に痛くなり歩くのが苦しくなってきたが、街の中心部あたりから煙が上がり火災が拡大してきたため、被爆した人たちは風下の方に移動を始めたので、私も学校に行くのをあきらめ、人々の後について歩き始めた。郊外の小学校の仮設救護所にやっとたどり着いたが、ひどい怪我人や、動けない火傷の人たちで満員状態であり、私のような少しでも歩ける負傷者については相手にされない。とにかくどこかで治療をうけなければならぬと火傷で痛む足を引きずり救護所を捜したがどこにも見当たらない。

次第に火災も拡がり、人々が逃げまどってくるので、これ

では家に早く帰らなくては駄目だと思い広島市から歩きだした。途中ある会社の建物が壊れず残っているので、誰かいれば葉でもと建物に入ったが皆逃げだしてしまつて誰もいない。疲れと火傷の痛みのため近くの防空壕に入り坐りこんでいると、外で「キレイな雲がでている」との声がするので出てみると、美しいピンク色の入道雲が今逃げだした広島街の真上にわき上っている。火傷の痛みも忘れてしばらく見上げていた。

夕方になり、ようやく動きだした列車に乗ることができ、自宅の近くの駅にたどりつくことができたが、心配して駅に迎えに来ていた母親は、私が声を掛けるまで自分の息子と判からなかった。そのはずである。学校の制服は焼きちぎれてボロボロのうえ、顔は火傷のためラグビーボールのように腫れ上がり、片方の目はつぶれてしまっている。とにかく病院ということで歩きだしたが、とうとう病院の入口で一歩も歩けなくなり坐り込む仕末となった。脱水状態のためベッドの上で注射した食塩水の痛さを今でも思いだす。

私は幸いにして原爆投下後すぐに郊外に逃げだし、市街地に入らなかつたので命を取りとめたが、街の中心部の疎開跡地の整理に集合していた級友たちは、ほとんど死亡、行方不明（遺体が見つかからない）となつてしまい、助かった少数の級友も被爆後二、三か月後に原爆症で死亡してしまつた。もし当日刻どおり列車が広島駅に着き、集合場所に行つていたら今日の自分はないのではないかと思ひ、運命の不思議さ

を感じている。

もうすぐ被爆後五〇年が近くなり生存者も少なくなる一方、戦争の記憶も風化してきている。昭和二〇年八月六日、原子爆弾で倒れた紅顔の学友たち、さぞかし、残念無念であつたろう。あと一〇日で戦争は終わったのである。生きていれば戦後の社会の中軸となつて活躍したのであろうあの顔、この顔を思い出す。私も還暦を迎えた年齢となつて、なぜ自分だけが生残っているのであろうか、と毎年夏がくるたびに、内心爆死した人たちに対し申し訳ない思いにかられている。

歴史は個人に関係なく吹き荒れて通っていくが、受けとめるのは個人であることを思い、四七年前広島、長崎でなくなつた数十万人の霊安かれと祈る昨今である。



寄付したことに對する感謝狀

〈提供 清水錦子さん〉

## 「原爆」生残りの証言

● 本天沼一丁目

尾山 俊二

(大正六年生まれ)

昭和二〇年八月六日の朝出勤途上、急に空が明るくなって周囲の人々が何か口走りながら走り出した。と思った途端、猛烈な爆煙を浴びて私は左顔面と左腕に火傷を負った。

場所は山陽線己斐<sup>こい</sup>駅踏切上、爆心から二・五キロの地点である。白煙の中に黄色いガスが混っていたので「毒ガス」と判断し吸いかけた煙を吐き出し、線路を飛び越えプラットホームの影に待避した。

原爆が炸裂した際の巨大な「きのこ雲」の裾野で榴散弾を数千倍にしたような勢いで炸裂した爆煙の一つに見舞われたのである。

ちょうどその時、遙か上空で急に飛行機がエンジンを掛けて急激に機体を引き起こしたようになり声を聞いた。

それは原爆投下機が福山市上空で援護機と分かれ、単機密かに空中滑走で広島市上空に侵入、原爆を投下すると同時に爆風を避けるためエンジンを始動し、垂直旋回でその場を離脱したのだという事を後になって知った。

その時を境に広島市の市街は天と地をひっくり返したような

惨状となったのである。防空壕はいっぱいなので、取敢えず家に引き返し仮<sup>かり</sup>繙<sup>ほう</sup>帯をした。

そのころ、街の方から大勢の人が行列のようになって現れて来た。背中からボロ切れが下っているのによく見ると皮膚が焼けただれてぶら下っているのだ。中には全裸で泣きながら歩いている少女が何人かいた。赤ん坊に乳房を含ませながら歩いている母親も子も全身大火傷を負っている。

「山へ逃げい」といいながら力なくゾロゾロと県道を山の方へと逃げて行ったが、その数は見渡しただけでも数千人はいたようだが、果たしてその内の幾人が生きて帰って来た事であらうか。中に幽霊のように両手を下げて歩いているのが沢山いたが、それは名実ともに亡者の行進だったのである。

午後になって兄が悄然<sup>しやうぜん</sup>とした姿で帰って来た。彼は齒科医で左官町の治療室で治療中に被爆したので川に避難し、「陳列館」(原爆ドーム)が燃えるのを見ていたという。彼の話では、広島島の町はまる焼けで、おかしな事には原爆の穴がどこにもあいていないという。それはどえらいものを使ったに違いな

い。さあ大変だ、姪を探しに行かねば、という騒ぎになった。それまでは自分たちの廻りがやられたものとはかり思い込んでいたのである。

私は単身山の家を下って国道筋に出たが、足の踏み場もないので、己斐駅から市電の線路依いに鉄橋を渡り、天満橋のたもとまで来ると大勢の中学生が倒れていた。意識だけは明瞭なのは既に「無力症状」を起しているためである。

口々に「連れてって下さい」と声を掛けているがこう大勢では取り合う人もいない。みんな足早に通り過ぎて行く。年配の男の人が一人一人に氷砂糖を含ませてやっていたが本当な奇特な事だと感じた。

昨日までであった広島町の町は忽然と消え失せていた。川の杭には糸纏まきわぬ少女が引掛ったまま死んでいるので、鬼気迫るものがあつた。

橋を渡ると更に凄愴せいそうになった。あちこちに人が倒れ、全身ずるむけの男が寝転がったままわめていた。腹に革バンドがあるのと両足に兵隊靴が残っているので兵隊さんだと解かつた。

土橋一带（爆心から約七〇〇メートル）で大火傷で転っている女学生の間を探して歩いたが、姪を見つけることは出来なかつた。本人は未だに行方不明のままである。

小網町の土手で負傷者の手当をしている救護隊がいた。一行の中の娘さんに尋ねると「岡山医専（現、大）です」と答えたが、是等の人たちは二次放射能で内臓をやられて、あと

でみんな死んでいる。担架で負傷者を運んでいた水兵さんたちも……。

原爆のあと二、三日すると「あちこちで人が死ぬそうだが、うちは大丈夫だろうか」と姉が言い出した。兄は食べ物を受けつけず寝たきりであつたが、ちょうど七日目に容態が急変し「第一次原爆症」で死亡した。

当時はいずれも原因不明の死亡とされていたが、二か月程経って「毎週、毎月、毎年ごとに第X次原爆症による死亡、と呼称する」と新聞紙上で発表があつた。

翌七日、私自身も無力症状になって倒れた。郊外の病院を頼って疎開し、安静と火傷の手当を受けたが、何分市中が全滅したためあり合せの薬を使って貰うくらいのことしか出来なかつた。そこにも大勢避難した人が手当を受けに来ていたが、中には脱毛したり歯ぐきから血の出てる人もいた。

原爆が炸裂したのは市街のほぼ中心点。具体的には「原爆ドーム」のやや東南寄り。黒川病院の直上約三八〇メートルの上空である。

これは後に市の調査で原爆の閃光の高熱のため市街地に出来た焼痕の中から三か所を選んで測定されたものである。

「原爆は所定の位置に投下された」と基地に報告されているそうだから、これを見ても非戦闘員を狙ったことは明白である。「一挙に壘殺むさくされた者一七万人。後遺症による死亡を加えるとその数三〇万人」という数字は、決して誇張されたものではない。

当時の広島市は市勢拡張で人口四五万の地方都市になっていた。が、旧市街地に居住していた私の親戚、縁者、知己、朋友の悉くが即死し、中には原爆の直下で白骨と化した者さえいる。無事に脱出した者でも五年目、一〇年目に原爆症で死亡しているし、四〇年振りに原爆症が出て輸血を行っている者もいる。

四六年経った現在なお社会復帰の出来ぬまま療養を続けている市中の人も数多くいる。八月六日以降現場に入った人はもちろん、同じ円周上にいた人でも受けた放射能の濃、淡で生と死に分かれるのである。

アメリカが原爆を使ったことに対して今更怨み事をいうつもりはない。しかし原爆の破壊力もさることながら、問題はあの悪質極まる毒性である。

もう二度と戦争はおことわりである。戦争や核兵器のなくなることを願い、みなさんとともに努力していきたい。

